発展途上国における教育開発のための哲学プラクティス
～国際協力と哲学へのニーズ：カンボジアでの実践から～

Philosophical Practice in a Developing Country,
International Cooperation and Needs for Philosophy: A Case Study in Cambodia

望月太郎（大阪大学文学研究科現代思想文化学）

はじめに

筆者は約７～８年前から東南アジアの後発途上国の一つとされるカンボジアにおける哲学プラクティスの普及を目指し、問いの技法、哲学カウンセリング、ソクラティック・ダイアローグや哲学散歩などに関するセミナーやワークショップ、そして哲学カフェを企画・開催してきた。ここで、その実践を報告する前に、ひとつのエピソードを紹介したい。

プノンペンで開催された国際会議に参加するため、初めてカンボジアを訪れたときのことである。友人のカンボジア人教員が運転する自家用車の助手席に同乗していた。渋滞する道路を緩々と走っていた、その時、隣車線を走っていた大型トレーラーが車線変更しようと寄って来て、私たちの車に接触した。渋滞のせいでスピードが出ていなかったので、幸いに怪我をすることはなかったが、友人の車は側面が大きく損傷した。大型トレーラーの運転手が携帯電話でオーナーを呼び出す。私の友人も頼りにしている同僚を呼び出す。警察官がやって来る。彼らは車外に出て早速に示談交渉を始めたが、やがて現場に大型トレーラーのオーナーである運送会社の社長とおぼしき人物が高級車に乗って駆け付けた。この人物は警察官を見るやいなやドル紙幣を数枚握らせた。すると警察官は直ちに現場を立ち去った。残った当事者たちで示談交渉を再開し、結局、穏便に話が纏まったようで、友人の車は、その社長の一存で近所の工場へ運んで修理することになった。あとで話を聞くと、そもそもカンボジアでは試験を受けて運転免許証を取得する者など殆どいないという。また、そのことが交通事故が多発する原因にもなっているという。誰も交通法規と正しい運転の仕方を知らないのである。その帰途、友人が吐き捨てるように言った。「カンボジア人は骨の髄まで腐っている。」この国ではすべてが賄賂で解決される。彼はこうも言った。「この国にも法律はある。しかし誰も法律を使おうとしない。」

ところで今なぜ発展途上国で、なぜ哲学プラクティスなのか。その理由は、途上国には哲学へのニーズがあるからだと答えたい。上のエピソードは発展途上国における「腐敗 corruption」の現実の一端を示している。社会の隅々まで「腐敗」が染み渡っている。「腐敗」とたたかう未来世代の若者を育てる道徳・市民性教育への期待が高まっている。こうした切実なニーズに対して私たちはどのような仕方で応えることができるであろうか。ここで「私たち」とは、当事者である途上国の人々に対して外国から支援の手を差し伸べる外部者であるわけだが、上のエピソードにおいて当事者によって語られた「腐敗」の問題の文脈に沿って考えれば、期待されるのは途上国でこの種の問題を解決する能力を育てる教育開発に役立つ哲学教育のための国際協力だということになる。そして哲学プラクティスこそがそうした国際協力を在野で効果的に遂行する上で最適なものだと私は考える。

1　私とカンボジアとの関わり

私がカンボジアの地を踏んだのは、上にも触れたように、2011 年 3 月、バンコクに事務局を置くユネスコ・アジア太平洋地域オフィス人文社会科学部門が主催し、プノンペンにあるカンボジア協同平和研究所（Cambodian Institute for Cooperation and Peace, CICP）で開催された第２回青年平和大使トレーニングワークショップに講師として参加したのが最初である。このワークショップに私は日本の市民運動につ

いて講義することを任務として招かれたのだったが、閉会後、一人のカンボジア人青年から声をかけられた。カンボジアには哲学を専攻する大学院がない（当時）。しかし、この国の将来を考えると、大学院レベルで哲学を学べるコースを作る必要がある。知恵を貸してくれないかと言うのである。これがきっかけとなり、早速に同じワークショップに講師として参加していた友人のカンボジア人教員から彼の同僚を紹介され、意気投合してカンボジア国内の大学に哲学専攻修士課程を開設するプロジェクトを立ち上げることになった。翌年、プロジェクトを実行するため、再びカンボジアを二度続けて訪れ、オランダの実践家であり、私の友人であるピーター・ハーテローの協力を得て、プノンペンにある私立大学の大学院人文芸術学専攻修士課程の中に一専攻として哲学プラクティスを核とするコースの開設を進めることとなった。この大学では学部の教養教育科目としてクリティカル・シンキングなどが教えられていたが、どうせ作るならまったく新しいコンセプトのものを作ろうと考えた。まず哲学プラクティスとは何であるかを現地の教員や学生に知ってもらうため、オランダ、ロシア、韓国、日本から実践家と研究者を講師やモデレーターとして招いて、同じ年の 3 月に 1 回目、続いて 11 月に 2 回目の国際フォーラムを開催し、セミナー、ワークショップ、デモンストレーションのためのセッションをプレイベントとして企画、実施した。同時にカリキュラムの検討を進め、授業科目の内容や教員配置を考えるところまで中身を煮詰めた。

しかし事はそう簡単には運ばない。2018 年 7 月に実施された総選挙に向けて、当時、市民の間で３０年にわたって政権を取り続けているフン・セン首相の「腐敗」を糾弾する声が高まり、それを抑えようとする権力によって街頭デモが潰されたり、野党第 1 党であったカンボジア救国党への弾圧が強まるなど（この党は、総選挙の直前、当局により解党され、党首は投獄された）、政治腐敗がこれまでになく大きく問題化する矢先であった。私たちのプロジェクトに協力するカンボジア人大学教員のうちの複数の者が政治的理由から大学を追放されたり、学部長補佐役を解任されたり、また私に声をかけた青年も主宰していた NPO を解散に追い込まれるなど、風向きが変わった。私たちは大学での活動と並行して、新たに NPO を立ち上げる準備をしていたが、思想が絡む組織に対しては当局の監視が厳重化しつつあり、Facebook における私たちの組織のフォロワーはすでに二千人を超えるまでになっていたが、認可に漕ぎ着けるに至らず、結局、私たちの NPO 設立は挫折した。

その間、私たちは、プノンペン市内で場所を借りて哲学カフェを開いたり、哲学散歩を行ったり、大学外での活動を活性化していった。参加者にはカンボジア人の教員や学生のみならず市民や僧侶も加わった。他方、この間プノンペン王立大学（RUPP）に哲学専攻を置く大学院修士課程が設置され、大学院設置へのニーズはひとまず応えられた形となり、また件の私立大学ではかつての協力者であった副学部長が別途考案したリーダーシップ専攻のプログラムが開設される運びとなり、哲学プラクティスに関するアイデアも部分的にそちらの方に吸収される形となり、私たちのグループはこの大学を離れるようになった。

そこで私たちは、2017 年秋頃から、こんどは NPO ではなく有限会社として哲学カフェの運営機関を創設することに方向転換し、会社設立に向けて活動を再開した。私企業であれば当局の監視も緩やかであり、資金と物件さえ調達できれば比較的容易に開設可能だからである。資本金は私とカンボジア側の設立発起人でシェアし、物件はプノンペン王立大学メインキャンパス近くの学生が集まりやすい市街地にタウンハウスを見つけた。設立手続きを終えた 2018 年 11 月末、「プラッニャーサーストラ・ウィハーラ Centre for Philosophical Research and Practice」が誕生した（Facebook: Prajñāsāstra Vihāra をご覧いただきたい）。以下、これまでに実施してきたいくつかの取り組みを紹介する。

2　カンボジアで実施している哲学プラクティス：さまざまな取り組み

2.1．セミナー：問いの技法

国際フォーラム「平和構築と持続的開発のための哲学プラクティス」第１回及び第２回（The 1st/2nd International Symposium on Philosophical Practice in Peace Building and Sustainable Development, PUC, 17 March/24-26&30 November 2012. 日本学術振興会科学研究費助成事業「平和構築のための哲学実践」平成 24 年度～平成 26 年度による）において、問いの技法を学ぶセミナーを開催。「問いの技法」は、周知のようにオスカル・ブルニフィエが実施しているセミナーのタイトルである。私自身、彼の指導下でトレーニングを受けたが、特に相互問答法にこだわらず、さまざまな形で可能性を追求している。これまでに扱ったものとして、哲学カウンセリング、ソクラティック・ダイアローグ、問いの技法の批判的思考教育への応用、等々。理論を紹介すると同時に、全員参加で実際にプラクティスを試みる。上記のフォーラム以降も、プノンペン王立大学キャンパス内に置かれたカンボジア日本人材開発センター（CJCC）で会議室を借りるなどして随時開催してきた。2015 年 7 月、ロシアからヴィクトリア・チェルネンコを招いて PUC で行ったセミナーの様子が YouTube にアップロードされている（https://www.youtube.com/watch?v=gUCbDR3HGS4）。

2.2．哲学散歩

上記の国際フォーラム２回目の開催に合わせて、2012 年 11 月 30 日、世界遺産で知られるアンコールワット（シェムリアップ）へ、カンボジア人教員グループ及び外国（タイ）からのフォーラム参加者と一緒に旅行し、ハーテローをファシリテーターとして遺跡ウォークを開催。方法は、彼がロッテルダムのシティー・ウォークで用いている手法を採用(1)。あらかじめ準備した哲学者からの短い引用文が書かれた紙片を参加者に渡して、参加者は散歩に出発する前にそれを読んだ上で歩き出す。散歩中は喋ってはいけない。念頭に置いた引用文と歩きながら目に入ってくる風景との関連性を思いながら歩く。遺跡を歩きながら、そこだ！（つまり、引用文において理解したことを直観できる景色に出会った場所）と思った所で「ストップ」と声をかける。そして他の参加者に対して、なぜそこなのかを簡単に説明する。この場では他の参加者は質問してはいけない。そうして、また皆で歩き続ける。全員が「ストップ」を終えて帰還後、反省会を開いて、それぞれの引用文と「ストップ」をかけた景色の関係について、全員でディスカッションする。その後、シティー・ウォークをプノンペン市内でも行った。

2.3．こどものための哲学

プノンペン市内にあるヤマダ・スクール・オブ・アートとアルバート・インターナショナル・アカデミーでこどものための哲学（P4C）のセッションを持った。前者は、日本人の美術教師・芸術家が経営する、幼児から大人まで、相当に専門的なデッサンから絵画、デザイン、最近はアニメの制作までを教える学校である。校長先生は以前に王立芸術大学の客員教授を務めた方であり、芸大の学生が土産物のような絵しか描けないのを見て、ほんものの芸術家を育てることを目標に開校したと仰っていた。ここで教室を借りて、絵を習いに通って来ている小学生と中学生と一緒に、カンボジア人哲学教員２名がファシリテーターとなって「カティローク Gatiloke」（カンボジアの民俗伝承集）の絵本を材料として実施した。参加したこどもたちは絵本のストーリーについて自由に質問し、ファシリテーターとの応答を楽しんでいた。使用言語はクメール語（カンボジア語）。

最近、多くのインターナショナルスクールがプノンペン市内に設立されている。富裕層の親がこどもを就学前教育段階から通わせている。理由は、公立校の教育の質が低いことに加えて、公立校のセキュリティが悪く、万が一の場合を考えて安全のためインター校にこどもを通わせる親もいると聞いた。教育言語は多くの場合、英語である。英語が使えるようになる、すなわち高収入につながる。アルバー

ト・インターナショナル・アカデミーは中華系のインター校。初等部でセッションの機会を得た。内容、手法は先のアートスクールのときと同じ。使用言語は英語。P４C の活動は徐々に現地化し、自発的に行われるようになってきている。カンボジアにおける P4C 活動を広報するため、YouTube に動画をアップしたので、ご覧いただきたい（https://www.youtube.com/watch?v=kXAeex5oK7E）。

２.４．哲学カフェ

当初は市内のコーヒーショップでスペースを借りて開いていたが、設立準備中の「プラッニャーサーストラ・ウィハーラ」の社屋に 2018 年 8 月からコーヒーショップ Philosophy Café Cambodia をオープン。現在はここで哲学カフェを毎月開催している。哲学カフェは、集まった人々が自由に対話を行う場所であるが、同時に活動の現地化に努めている。

「現地化」という言葉で意味するのは、１）カンボジア人のファシリテーターを養成する、２）クメール哲学（カンボジア哲学）とは何かを考える、３）「腐敗」の問題と取り組む、４）クメール語で哲学することを４つの柱として活動を組織化することである。

カンボジアで哲学カフェを運営する際に留意すべき点について、私の覚え書を記す。

１）哲学カフェの活動が「国際協力」に終わらず現地で自立して持続するよう、カンボジア人のファシリテーターの育成が不可欠である。手本というようなものはないと思うが、コミュニティーボールの使い方などを伝授すると面白がって皆が使うようになる。また、以下にその理由を述べるように、クメール語で対話することが重要である。

２）こどもの哲学の項で触れた「カティローク」を活動の一環として行う共同研究のテーマとしている。クメール哲学とは何かと言うとき、既成の概念があるわけではない。民族の思想的アイデンティティ形成のためにカンボジア人がそういうものを求めているのだ。東南アジアでは一般に哲学と宗教は一体である。知恵は修行僧の教えに倣うという考えが、哲学を学ぶ者の心底にも存している。瞑想カフェができないかといった話が出ることがある。その一方で「カティローク」に表現されているのは、宗教的知恵ではなく民衆の知恵である。それもまたクメール人の思想を探る重要な材料の一つである。おそらくクメール哲学とは仏教哲学と民衆思想の合成なのであろう。

３）言論の自由が妨げられているこの国で「腐敗」を話題とするのはデリケートな部分を含む。「腐敗」が社会的問題であるという認識は共有されているが、人々は揶揄してもストレートに批判することは少ない。具体的な名称（政党、政治家、僧侶の名前、等々）を挙げたり、個々のケースに踏み込むことには注意が必要である。アプローチの仕方に工夫が求められる。例えば「お金」をトピックとして取り上げ、お金は何の役に立つかを議論することで問題化を試みた。

４）哲学カフェでの使用言語について私の考えを述べる。従来、基本的に英語でやってきたが、最近はクメール語で考え表現することを参加者に推奨している。問答の形が問いの表現される言語の制約に依存する（例えばクメール語には時制がない、主語を明示しないのが普通、形容詞と副詞の区別がない、等々）と同時に、事柄が問題化するプロセスは問題をめぐって当事者の人々が思考する言語の構造に深く関わっていると思われるからである。クメール語を使用して対話を行った結果、生産的な概念の発見に至ることがある。そこで英語が話せる参加者も敢えてまずクメール語で話してもらって、私を含む他のクメール語の理解が十分でない参加者に向けて内容を通訳してもらうようにしている。

３　何が求められているか----カンボジアにおける市民性教育について

市民とは誰のことか？ グローバル人材の育成が叫ばれる昨今、「市民」とは、「社会（市民社会）の一員であり、急速な変化を遂げる社会を生き、人権、平和、環境、開発などの諸問題を平和的・民主的に解決できる人間」のことであり、「このような市民はグローバルな観点から地球規模の諸問題を解決

することができるグローバル市民」ととらえることができる。そして「市民性」とは、「市民がもっている資質のことであり、社会に関する知識、平和的・民主的な社会を実現するために積極的に社会参画するための技能や態度、さらには異文化理解や共生ができ、自ら意思決定して行動できる資質」である……従って、市民性教育とは、このような市民、市民性を育てる教育である」と言われている(2)。平田(2017)のグループはカンボジアにおける大人世代の意識調査を行っており、それによると、現在、重要と考えられるコンピテンシーの中では「「環境」がもっとも重要な資質として［引用者註：5 点満点中］3.8 であり、続いて２位に「人権」(3.75) ……反対に、もっとも重要でないと考えられているのは、39 位「正義をもって不正に立ち向かう」」である。その一方で「１０年後、若者がこのコンピテンシーをどの程度達成しているべきか」の割合を提示した結果を見ると、最低であった「正義をもって不正に立ち向かう」は７位に浮上、アセアンに関するコンピテンシーの３分類、知識・理解、能力・技術、価値観・態度のうち、価値観・態度としては最上位になるという興味深い結果が示されている(3)。「腐敗」はカンボジア社会の隅々にまで染み渡る解決し難い問題であるが、このデータに見るように人々は現世代がこの問題を解決できるとは思っていない、その一方で未来世代が「正義をもって不正に立ち向かう」であろうと楽観している。

カンボジアの中等教育には道徳・市民性教育という教科があり、学部で哲学を専攻した教員が授業担当している。哲学カフェにも教員志望の大学生が多く集まってくる。国を愛する「良き市民 good citizen」の育成から社会を変える「活動的市民 active citizen」の育成へ、未来世代の教員が道徳・市民性教育の目標を変えていく、その活動の触媒となるような、教育開発のために役立つ哲学プラクティスを通した国際協力が求められている。

【註】

(1) 哲学散歩の一例としてのシティー・ウォークについては、Second International Architecture and Phenomenology Conference, June 26th-29th, 2009, Kyoto, Japan. Architecture and Phenomenology, Conference Program & Abstracts, p.74, Peter HARTELOH and Taro MOCHIZUKI, 'Thinking in the City: City Walks as Philosophical Practice'を参照。

(2) 平田利文〔編著〕2017.『アセアン共同体の市民性教育』東進堂 61-62 頁。なお、カンボジアに関する章は羽田沙織が執筆。

(3) 前掲書 64-65 頁。

本報告は平成 30 年度採択科研費基盤研究（C)「発展途上国における教育開発のための哲学プラクティス」（研究代表者：望月太郎）による成果の一部である。